

大通和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の三十一

安東伸元

毎年この時期になると、新聞紙上を大きく占領する広告記事が連日のように私の眼をとらえて、毎年変わることはない異様なと言つてもいい不審感を覚えさせられる。予備校が、難関有名大学への合格を果たした自校出身者を明示紹介する記事ではなく、中には百名以上の顔写真までを掲載した広告記事が、塾同士の覇権を競うかのように紙面の三分の一を埋めている。その上、同じように合格者名の発表を告げる週刊誌の広告までがそれに加わる。私は数十年前からこの社会現象を、極めて異常と感じている。何を異様・異常と感じるのかを少し論じてみたい。この世に生を享けた人間がそれぞれ違った環境と個性をもつて生きる中で、やがて自我に目覚め自立を欲し、自らの

人生を開花させたいと思い、向上心を持つて教育にわが身を委ねるのは、本来そうあつてしかるべき当たり前の事である。この場で展開される人間と社会の関係は、つまり親と子・教師と生徒・友達と自分などのかかわりにおいて、実にさまざまな人生模様を現出させるはずである。そしてその中から、いくつもの煩悶や葛藤や挫折が生まれ、その苦痛に耐えることでこの世を生きぬく力が得られるわけである。しかるに人生を切り開くにあたって、何者かが用意した一方向的な目標が提示され、あたかもそれが真理に即した好ましい指針であるかのような宣伝が展開され、教育熱心な親たちの不安を刺激して、関心を煽っているのである。本来このようなことはあつてはならぬし、また成熟した文化国家なら許すはずのないことである。物事を深く考えない人間は、この紙面を見て、短絡に生き方の示唆と受け取るかもしれない。そのことを十分知っていないながら、およそ良識の在りようを指し示すはずの新聞が、営業のためとは言え、嬉々としてこのような広告に紙面を提供する様子を異様と言っているのである。そしてまた一方、このように多額な広告宣伝費を費やしても採算の取れる受験産業界が、怪物のように存在する現状を正そうとしない社会を異常と言っているのである。この妖怪は、「教育は、しかるべき資本の

投資とプロ受験技術の取得によって花が開き、輝かしい将来が約束される」と断言してはばからず、大衆もそれを信じて疑わない。この風様は、国家が仕組んでいる社会構図の中から生み出されたものに他ならない。だから数々の指摘や批判を意に介せず、この歪んだ教育思想が大手を振って横行し続けているのである。二十歳代に読んだ書籍の一節で、今でも時々脳裡をかすめる文章がある。書名は「夜と霧」(ドイツ強制収容所の体験記録)。「みすず書房」発行、昭和三十一年初版、同三十五年二十二刷発行。著者は精神医学者ウィクトル・E・フランクル。ユダヤ人であったがために一家がアウシュヴィッツへ送られ、両親、妻、子供はガスで殺され、一人奇跡的に地獄から生還した人である。この書は、訳者のあとかきによると「冷静な心理学者の眼でみられた極限状況における人間の姿の記録」である。この本の解説部分に次のような記述がある。「絶望のあまりに自殺する囚人が、朝発見される。すると収容所の司令官が、朝発見される。すると収容所の司令官がやってきて、検証が始まる。死体をあらゆる角度から写真にとり、この惨めな自殺が他の収容者による殺人でないかどうかを確かめるために同室者から調書をとる。このように展開される道化じみた偽善は、全くすばらしいものであった。それは、毎日組織的に数千の人間を殺している収容所の

親衛隊幹部が、少しは一人の不幸な人間の運命に同情していることを示すかのよう展開された。■この一文が脳裏を離れないのである。フランク教授の本文は、「限界状況の中での人間の姿を理解しようとするもので、その深い人間知から滲み出る叙述の調子の高さは、現実の悲惨を救うのにせめてものよすがであろう」と、出版者が序に書いた通りの意味をもつものである。

一九六一年五月二日に買ったと自書しているその日以来、私は折々に幾度となくこの本を手にとって、その都度何かを得てきた。得たことは、怒りによって立ち騒ぐ心の鎮静であったり、不信と不安で乱れる思考の整理であったりである。さて、私の手元に政府が発行した様々な審議会資料がある。つい最近批判の集中砲火を浴びたものに「美しい国作り」企画会議がある。当時の総理大臣の提唱によって編成された会議で、学者、高名文化人など有識者と呼ばれる十二人の委員が名を連ねている。このプロジェクトが批判的になったのは、四九〇〇万円もの経費を投入しながら企画会議がわずか二回で解散したからである。これは明らかに茶番である。教育問題審議会・文化振興審議会などなど、どれを採り上げてもしたり寄つたり茶番劇が、錚々たる文化人たちを起用して時折繰り広げられる。国がこの問題について決して無関心ではな

い事を、広く国民に知らしめるかのように形ばかりの道化芝居が行われるのである。私はこれまで幾つもの種の会議を注意して観察してきたが、その審議で述べられた事柄が現実に反映された証を知らないもので、政府が仰々しく持ち出す提言にはすっかり心が冷めてしまっている。現場の現実は次のとおりである。古典伝統芸能鑑賞会を継続したいが、文科省からの予算が削られて中断せざるを得ない事を詫びる、小・中学校の校長・教頭先生の声が、今年もまた私のもとに届けられる。行政の担当者は相変わらず古典伝統芸能に関する正確な知識も見識も持っていない。ジャーナリストやメディアの担当者も似たり寄つたりである。何故かと言うと、治外法権的に存在する古典の世界を扱うには、既存の枠組みを保守し先人のやりかたを踏襲してさえいれば問題はなく、他の部署のように猛勉強と研修を重ねて専門家になる必要がないからである。このような扱いを受けて、古典芸能の中心に位置を占める者たちはますます特権意識を強固にする。この古色蒼然とした枠内から得られるものについての功罪が様々に検討され、大方は改革の是非が論じられているにもかかわらず、一向に変容する兆候がつかがわれない。人生訓話などではなく、ただ能・狂言を現代社会に即して分かりやすく講義演習しているに過ぎないのに、

出講を続けている大学や高校の学生から毎年確実に、「これからの人生に役立つ講義をありがとうございます」と述べたレポートが数編提出される。これは明らかに新しい若者からの反応である。しかし、古典のこのような切り口は枠外とみなされるのか、国家的な教育の場でこのような報告はまともに取り上げられたことがない。世界を相手に音楽や演劇に関するシンポジウムが開かれる場合、体裁作りに名家の当主級の人物を出席させることでお茶を濁しているから、自国の古典伝統芸能が主軸的に論談されることがない。一方西欧の文化芸術についての論究は、本家の水準を遥かに超えた学術的状態で展開される。この様子は、必死に権威の上塗りを重ねて、本家争いをしかけている次男に見えたりして滑稽である。政治・経済・教育・文化の場に、世に言う「三百代言」や「猿芝居」に等しい言動が百出している。これらはみな、旧体制の既得権に守られた特定の者だけを利するすがゆえの、不実と欺瞞を繕わんとする方便の表れである。繕われて守られてきた塗り壁の向こうの本体も、ようやく露わになってきた。少なくとも舞台上に身を曝して、わが身の生きざまを問おうとする者は、全身全霊を発揚させて燃えたいと思うものである。演者が燃え、観客が燃えて舞台が成り立つのである。能の会を見ていただきたい。

不燃焼と不消化の面持ちを露わにして帰路を急ぐのは観客だけではない。観客にもまして、くすんだ表情の出演者たちが楽屋口から吐き出されてくる。斯く言う私も時には、まさしくそのような一人になっている。「晴天白日の下でわが身を曝け出して生きたい!」と、叫びたい気持ちが鬱勃とおこってくる。春の陽気を待つ気持ちが、そのような衝動を起こさせるのであろうか。

(七三歳の春)



安東 伸元(あんどう のぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授。大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二一年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受ける。「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「商人」

山田師久

最近、あまりの忙しさにものを考える力がなくなってきた。だから、文章もますます駄文になってきている。多忙さゆえ最近時間のたつのが速く感じることもある。これは自分が年を取ったからだと感じていた。日野原重明氏は「年をとるにつれて時間の経過が速く感じられる」というピエールジャネの言葉を引用して、子どもと老人では過ぎていく時間の感覚が違うことを説明している。六十歳の人は十歳の時の六倍の速さで時間がたつように感じられる(日野原重明「いま伝えたい大切なこと」)というのだ。そういえば、わたしも子どものころは一日が過ぎるのがやたら長く感じていた。それは何もすることがなく、退屈する日々でもあった。それに比べて現在は、考えなければならぬことが頭の中にいっぱいある。また、しなければならぬ仕事も山積している。早朝出勤して仕事を始めると、気がつけば外は真つ暗、くたくたに疲れて帰宅して床についたら朝だ。だから時間が速く過ぎるような気がする。しかし、ある日、中学生が電車の中で「時間の立つのが

速いよなあ」「うん、僕もきのう布団の中に入ったと思ったら、目が覚めたで。」などと年寄りのような会話をしているのを見た。一緒にいた同僚が「最近の中学生は充実した生活を送っているのね。」とうまい表現をしていたが、中学生が忙しいというのは近年になってのことだろう。学校の授業が終わると、クラブ活動、そして晩からは塾、夜更けに帰宅する。それから夕食をとり、風呂に入って、ゲームをするかテレビを見る。その間絶えずメールのやりとりをしながら過ごしていると、一日は一瞬のうちすぎるのだ。日野原氏は年をとると時間が速く流れるように感じる理由を「感性が薄れていくからかもしれない」としているが、それならば忙しい中学生も感性が薄れていくのかも知れない。

ニユートンは「空間と時間は何ものにも影響されず、無限の過去から無限の未来まで変化せず存在するもの」とした。時間については、空間のどこでも同じ速さで流れるものとし、「このような時間を「絶対時間」とよんだ。古典物理学の世界では時間が速く流れたり、遅くなったりするということはありません。遅くならないこととされていた。しかし、その「絶対時間」に対して十九世紀、オーストリアの物理学者マックスは次のような批判をした。「時間は時計で測るが、世の中にあらゆる時計がなくなったら時間

は流れるだろうか。宇宙のあらゆる物質がなくなつたとしたら時間すら存在しないのではないか。」と主張し、時間は物質との相対的な関係で存在することから、これを「相対時間」と称したのである。後にアインシュタインはこれに影響を受けて「相対性理論」を生み出した。この理論では「時間や空間は不変なものではなく、どんな運動をしている人が測つても光の速度が同じになるように、運動状態によつて時計の進みや距離を測るものさしが変化すると考えた。」(二間瀬敏史『時間論』)のである。言い換えると、光の速度で動いているものに乗っている時計を、止まっている人が見ると、時計の針はゆっくりと進むのである。つまり、時間は絶対的なものではなく、運動に影響され、速くもなり、遅くもなるものと考えられる。人間活動を運動の一つと考えれば、時間は人間活動・精神活動に影響されるとも考えられる。忙しくなると時間が速く進むのであれば、人間活動の量に比例して時間の速度が速くなると言える。逆に何もすることがなく退屈であれば、時間の速度は遅くなるに違いない。時間は人間活動の仕事量と相対的な関係にあるのである。

一方 現代人の時間は地球規模で速くなっている。なぜならば、世界各国至る所で人々は忙しくなっているからである。その要因

の一つはパソコンの普及とインターネットの普及である。これらのお陰で社会は確実に変貌している。私たちは分刻みで、あるいは秒刻みで働かねばならず、そうすることが当たり前前の社会となつてしまった。メールひとつとつても忙しさに拍車をかけるツールと言える。パソコンのメールで必要事項をやりとりすることで、非常に便利になり、情報の伝達が速くなった反面、速く返事を書かねばならなくなった。メールの送り手が急ぐ用件と考えてメールを送つても、受け手が頻繁にメールを見ない人ならば、役に立たないので「頻繁にメールチェックをしろ」ということになる。そうすると、速く仕事ができ、それが評価されることとなる。速さを追求する仕事では、一つ一つのことなどしてはいられない。あるいはじっくりと物事を考えることなど不要になつてくる。そして普段身の周りにおこる出来事に感動したり、感激したりすることも少なくなる。感性など不要になるのだ。

もう一つ情報化社会の例をあげると、インターネットでの買い物だ。私の同僚で、常に鞆の中に本を数冊入れている読書好きがいる。彼は最近引越しを機に家人の要望で、すべての蔵書を処分した。しかし、また次々と本を買い求めている。その手段がインターネットである。ネットで検索し

て注文すれば少々高くても確実に手に入る。彼はかつて処分した本でもう一度仕事に使いたいと思つたものを、大手書店や古書店をあちこち尋ね歩いて探したがみつからなかった。そこでネットで検索すると、北海道の古書店に一冊あることが分かった。早速、ネットで注文し、取り寄せることができ、至極ご満悦の様子で語ってくれた。「四百五十円の文庫本を送料共で倍の値段で買ったが、探す手間を考えたら安いものだ。ネットで見つけて三日で手に入るのだから速い。」というのが彼のネット買いを良しとする理由である。速くて簡単に欲しい物が手にはいるのが現代社会である。しかし、物を購入する過程に言葉のやりとりや駆け引きはなくなった。物を売りたい人はネットに商品を提示し、買いたい人はネットで検索すればよいのだ。

ところで、室町の人々は商売をどのようにしていたのだろうか。例えば「洛中洛外図」を見ると洛中のいたるところに、商人の姿が見られる。舟木家本「洛中洛外図」に描かれている行商人(特に店を構えていない者)をみると、傘売り・八卦置き・まじゆり売り・天秤棒に桶をかついだ商人・しじみ売り・一服一銭・橋の上では乞食の隣で簪のような小物を売る者・算置き・巫女などさまざまな業種の行商人が描かれている。当然彼らはただ黙って物売るわけ

にはいかない。大道芸とも思える売り声
 商売の大事な要素となった。そして洛中の
 人々はその声を聞いて商品を買求めた。
 そこには買い手と売り手のやりとりがあり、
 駆け引きがあった。そのコミュニケーション
 が商品に付加価値を与えたのだろう。御
 伽草子『猿源氏草紙』では主人公の猿源氏
 という鯛売りが都に上り、洛中を『伊勢国
 に阿漕が浦の猿源氏が鯛買ふ多し』と言っ
 て鯛を売り歩いた。すると洛中の人々はこ
 の売り声を聞いて、「おもしろき鯛売りが
 な」と言つて鯛を買ひ、猿源氏は程なく裕
 福な身になったというのだ。売り声に節を
 付けていたという理由も考えられる。さら
 に「伊勢国に阿漕が浦」というのも京の洛
 中の人々が面白がったところである。その
 地が伊勢神宮の神饌区域のため庶民が漁を
 するところではないということ、人々は
 常識として知っていたからであろう。また
 その売り手の名前が源氏は源氏でも猿が付
 く源氏という一見優雅な、実は滑稽な名を
 名乗るところに面白味を感じたのである。

さて、狂言に登場する商人もさまざまあ
 るが、例えば「膏薬煉」に登場する鎌倉方
 の膏薬煉は、『平家物語』巻九に登場する
 「いけずき」という名馬が逃げ出したのを、
 自分の先祖の膏薬売りが膏薬を使って吸い
 寄せたという話を語る。これに対し、都の
 膏薬煉は、平清盛が六波羅の庭に置こうと

した大石を、膏薬煉の先祖が膏薬を使って
 吸い寄せて門から庭へ運んだという大言壮
 語を吐く。いずれも大ぼらの作り話とい
 うことは百も承知の上の口上である。聴衆
 はそれを楽しんだ。そしてその口上も付加
 価値として膏薬を買ったのだ。

また、狂言「酔はじかみ」も酔売りとは
 じかみ売りが登場する。この商人たちは少
 し違った面白さの口上を述べる。それは秀
 句という掛詞を駆使した口上である。すな
 わち、酔売りは「酔」という言葉を、また
 「はじかみ（山椒または生姜）売り」は
 「からい」という言葉を織り込んだ口上を
 述べるのだ。今でいえば駄洒落のたぐいで
 はあるが、当時の人々は手を打って喜んだ。
 室町の人々には時間がたつぷりとあつた。
 大道芸人のような口上を立ち止まって聞く
 余裕があり、楽しむゆとりが彼らにはあつ
 たのだ。



山田 師久（やまだ もろひさ）

大阪生まれ。一九八六年より安東伸元に師事。
 中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務
 所の学術ブレン。月例人輪讀会Vの座長を務め
 る。学問的指導の他、若いスタッフたちには人
 生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学
 校国語科教諭。

何を笑うかで二人は結ばれた ある新郎新婦の場合

森五六九

「この人と一生仲良く添い遂げていけるだろうか」そう感じた二人は寄席へ行けばいい。何を笑うかで相手の性格が分かる。

今年の二月、私が講師を勤めるECCアーティストカレッジの落語教室から一組のカップルが誕生した。同じものを鑑賞して同じ箇所で感動し笑いあえるという事がどれだけ素晴らしいか。二人を結びつけるに落語の力は大きかった。私はそんな二人の披露宴の司会を務める事になり、その過程をきっかけにして二人の落語に対する思いをはっきり知ることができた。

NHKの朝の連続ドラマ小説「ちりとてちん」の影響力は思っていた以上であった。連日の満員御礼はまさにこのおかげによるところが大きい。少し前までは落語はマニアックなものという印象が無きにもあらずだった。しかし今は違う。フツターの女の子がフツに落語会に通ってくれる時代だ。寄席の客層は実に幅広い。ところでかくいう私が落語に傾倒し始めたのもう三十年近くも前の話。かつて私は落語研究会というクラブ活動に励む落語少年だった。高校・大学とどれだけ寄席通いをした事だろう。

思い起こせば演者から見て私はあまりいい観客ではなかったような気がする。当時はあまり使われなかった言葉だがいわゆる「オタク」の部類。我々落研仲間は月に一度お寺の二階で開催されるその落語会の常連だった。五十名ほどしか入らない狭いその観客席に我々仲間が十名が並ぶといつもそこだけは異様な空気を醸し出していた。

第一鑑賞の仕方が全然素直ではない。演者が言い淀んだところで笑う。過激なギャグで笑う。ちょっと斜交いな笑ばかりを喜び、どれだけ元の落語を破壊してくれるかに期待した。まるで落語家が落語を普通に素直に真つ当に演じる事を拒否しているかのような脱線こそ落語の王道というような鑑賞態度。あるいはある決まった演者だけを鼻屑にして、それ以外は端から相手にすまいといった傲慢な振舞。そんな仲間内の中ではもっぱら蘊蓄の多さばかりが自慢になった。それも「誰某に弟子が出来たらしい」「あの落語家たちはどこそこで打ち上げをしている」「どの落語家とどの落語家は仲が悪い」「俺は落語家の誰それに名前を覚えてもらった」といったどうでもいいような事ばかり。また、そこに新人が加わるものなら連中はこそぞつて優越感たつぷりに落語レクチュアラーの押し付けを始めた。「大体、落語というものはな・・・」そこでは評論家気取りの鼻持ちならない連中が

幅をきかせていた。愛するがゆえの独占意識もあったかも知れない。落語初心者を鼻で笑う空気。たとい物を言わずとも空気は伝わる。寄席をマニア空間に閉じ込めようとしたその罪は大きい。「あの、私・・・落語観たことないんですが、誰でも気軽に聞かれましたのはい最近の事である。」

今だから言えるが、冒頭申し上げた件のカップルの新郎の事を私はそういう手合いの一人だと勝手に思っていた。先に決めつけておいて人を見てしまう私の悪い癖である。何故そう思ったのかと聞かれるとただ何となくとしか答えようがないが、そんな決めつけが間違いであると気がついたのは二人の披露宴の司会を頼まれたのがきっかけである。具体的にはその打ち合わせをする際に新郎と日が合わず、新婦と二人で会った時だった。「彼とはいつもどんな話をするの?」「やっぱり落語の話が多いですね」「へえ、例えばどんな?」「彼、落語の中で仔猫っていう咄一番好きなんです。それでそこに登場するお鍋っておなごしさんの事が特に気に入っていて・・・」「仔猫」といふ落語は地方から出てきたお鍋というお女中さんが船場の本店に雇われるところから始まる。お鍋は決して美人ではなく思いきり不細工な容姿として描かれる。しかし、お鍋は健気でよく気のつく性格の可愛

い女性である。私もこの咄を演じる時は容姿はともあれできるだけ可愛く描くよう心掛けていた。それにお鍋は弱い立場である。弱い立場であるがゆえ人一倍強く生きていく。人知れず身を粉にして他人に尽くすそんなお鍋の姿にどこか自分と共鳴する部分を感じ取ったのであろう。彼はコンピュータプログラマーエンジニアとして働く一技術者である。彼はお鍋をすこぶる応援している。彼はそういう感性で落語と向き合っているのだと彼女から聞いた時、私は彼に興味を湧いてきた。彼となら夜通し落語の話ができるのではと思った。それはただの蘊蓄オンパレードではなく、人がどう考えどう生きるかの話に繋がっている。落語を通して語る落語を超えた哲学といえるかも知れない。桂米朝師匠の著書から言葉を借りるなら「登場人物に悪人はなく泥棒とてもおつちよこちよいで間抜けで愛すべき人物に描かれている」のが落語であり、東京の立川談志師匠流には「業の肯定」が落語である。表現は違いが両師匠とも根っこの部分で同じ事をおっしゃっておられるように思う。人間は愚かな存在と認めたらうえでその愚かさに優しい視線を投げかけているのが落語である。落語の視線は常に人に優しい。お鍋という女性を語るうちにも何かしら暖かい気持ちになれるのではないか。そういうった語り合いを良しとする落語愛好家

の寄り合いなら私はいつだって駆け付けたと思う。単に知識の羅列ではなく何か思考に繋がるような、またそこに全くの初心者が加わるとも少しの前フリだけで共に語り合えるような話題が望ましい。狂言なればそこから主従関係のあり方について語ろうか、封建社会について語ろうか、日本文化について、笑いの毒や質について語ろうか。要はその会話には拡がりがあるのか、その芸能に関して全くの初心者をも素直に巻き込んでいけるのか、つまり知識でなく感性で会話が成り立つかどうか、それらが単なるオタク会話か否かの分かれ目だろうと思う。偏見かも知れぬが私は自己の反省を踏まえてそう申し上げたい。彼は言うまでもなく後者の会話ができる人である。

さて、披露宴では舞台女優である新婦が所属する大阪放送劇団の代表や演出家、それに先輩や仲間の女優の方々も多く駆け付け、それぞれが素晴らしい朗読や祝辞を聞かせて下さった。新郎の上司や落語仲間も皆ユーモアを交えながら誰一人紋切り型のスピーチすることなく、祝辞の文面をきっちり用意してきた者さえ会場の空気に押されたのかそのメモを捨てマイクに向かう場面が度々見受けられた。ともかく会場は常に微笑ましい笑いに包まれた。皆の気持ちが揃っていた。全員が人の話はちゃんと聞こうという大人の集まりだった。義理で来

た者がいなかった。「何を笑うか」その感性で全員が一致していた。極め付け最後に列席者が感動したのは新郎のこんな挨拶。「これまでの私は、自分一人で誰の力も借りずに生きていける、ずっと独身で生きていこう、そう思っていました。でも彼女と出会って考えが変わりました。結局自分一人では何にもできないんだ。やっぱり人は支え合ってこそ生きていけるんだという事を彼女のおかげで悟ることができました。彼女のおかげで愚かな自分を知りました」まさにこれが落語イズム。私もいい仲間に出会えてよかった。・・・どうか末永いおつき合いを。(了)



森五六九(もりごらく)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他ECCアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあって、好ましい芸能人の在り方を模索中。

芸の系譜

井上放雲

ユリウス・ベッキという人の著した『世界の名チェリストたち』という本の中に、「チェリストの系譜」と題された、大変興味深い補足資料が掲載されている。これは本文中に登場する1600年代後半から現代に至るまでの古今東西の名チェリストたちが、どこで誰に学び、また誰を教えたかを、本の訳者である三木敏之氏が系図にしてまとめ上げたものだ。これが私にとって、すこぶる面白い。眺めていると、実に様々な事に思いを馳せてしまう。

まず、図はチェリストの流派には大まかにドイツ派とフランス派の、二つの大きな流れがある事を示している。一般に知られているチェロの流派は、デュポール兄弟に源を発するフランス流派、そこから派生したセルヴェを頂点とするベルギー流派、ドイツ派の中のドツァワーによって築き上げられたドレスデン派などがある。更に一般に流派としては呼ばれていない流れもあり、理解しやすいようにイタリア派、スペイン派、ハンガリー派、ロシア派、という風に各国別に記してある。直接の師弟関係を二重線、直接の師弟関係はなるとも同じ

流派として影響を与えた人物同士を単線、別の流派との交流を矢印で結び、系図は複雑な枝分かれを見せながら現代まで繋がる。現代の著名なチェリストに関しては、録音や実演でどんな演奏をするのか知っている人も多いので、具体的にイメージをすることが出来るのは当然として、実はお会いした事もなく録音も残っていない昔のチェリストについても、自分としてはある種の親しみと感慨を持って名前を眺められる事になづく。というのも、往年の名チェリストたちは、演奏家として一流であったのみならず、作曲家としてチェロの為の作品を残していたり、また自らが築き上げた技術や音楽性の伝承手段としてエチュード（練習曲）を残している為、これまでに自分が学んできた過程で取り組んだ楽曲やエチュード・教則本の作者として、なじみ深い人物名のオンパレードなのである。ちなみに、自身の師弟関係も無理矢理系図に付け加えて遡ってゆくと、8代前の師匠として先のドツァワーへと辿り着く事が出来る。従って私は概ねドレスデン派の流れを汲んでいると言えるかもしれないし、更にその2代前にはフランス派のデュポールにも行き当たる。どちらも素晴らしいエチュードを残しており、私は長い間自分の芸の祖先とも知らずに取り組んで来た。今でもこの二人のエチュードは、技術的な訓練の題材とし

て練習に用いている。ドツァワーの113曲からなるエチュードとデュポールの21曲のエチュードは、これを難なくクリア出来れば相当安定した技術を手に入れられる位、レベルの高い練習曲だ（私なんぞ未だに四苦八苦の状態で取り組んでいる）。二人は18世紀後半から19世紀の前半に活躍した人たちだから、その頃すでに、一流のチェリストはかなり高度な技術を有していた事が容易に想像できる。

さらにちよつとミラーな視点で我田引水的にこの系図を読み解くと、実力・知名度の格差はさておき、芸の系図上「ヨーヨー」マは私にとって従兄弟小父（いとこおじ!?!）に当たるし、昨年亡くなったロストロポーヴィチも、かの名巨匠パブロ・カザルスも、案外遠くない親戚だ（笑）。「影響を受けた」という意味においては、直接単線で結んでも良い位だ（自称、心の師匠たち!）。しかし不思議なことに、クラシック音楽の場合、同じ先生に習ついわゆる同門でも、タイプは様々である事が多い。口伝によって師匠の丸ごとコピーからスタートする日本の古典芸能と違い、西洋音楽では比較的生徒の個性や主体性を重んじる傾向があるからだ。私と自分の先生を比べて見ても、テクニク・キャリア・音楽的造詣に格段の差があるのはさておき、演奏方法や音楽の発想など、多くの面で随分と違いを感じ

る。ところがしかし、基本的な「弓の持ち方」「姿勢」「音の出し方」など、外したくない芯のような所は意識的に、かつ無意識とが相まって、同じようなスタイルをとっているようだ。またそうでなければ、師事した意味がない。ある楽器店でチェロの試奏をしていた折、何の説明もしていないのに店のご主人に「齋藤さん（大学時代の先生）のお弟子さんやね」と指摘された事がある。また、オーケストラの合奏で先生の隣に座って演奏する際、音を出す前に息を吸って発音の準備をする一瞬の間合いに、得も言われぬシンク口感を覚える事がある。洋楽では「丸写し」は必ずしも評価されないが、学習段階に於ける「型」の習得は、非常に意義深いものだと言える。要は、「誰に」学んだかもさることながら、大切なのは、結局自分が「何を身につけたか」である事は言うまでもない。先人たちの伝えようとした技術や思いのDNAを、少しでも自分の身体に放り込み開花させるよう、日々精進を心がけたい。

そしてふと、日本の古典伝統芸能に目を向けると、世阿弥が『風姿花伝』で述べた「家、家にあらず。継ぐをもて家とす。人、人にあらず。知るをもて人とす。（家督そのものは家ではない。芸統を承けてゆくのが家なのだ。単なる人は人ではない。道を知るのが真の人なのだ）」という言葉を自

然な形で実践しているのは、日本の古典より余程後発の、西欧クラシック音楽界ではないかと思えてしまうのが残念な事だ。

こんな話題を取り上げたのも、2008年2月に発行された三書堂『狂言ハンドブック』第3版において、狂言師の系統として、大蔵流・茂山忠三郎家の流れの系図の中に、安東師匠が掲載されるという、画期的な出来事があったからである。こちらは血縁関係を実線で結び、師弟関係を点線で結んでいる。「家柄・由緒・血筋」を重んじる古典伝統芸能の世界にあつて、その実力と能楽全般に渡る深い造詣を武器にこの世界を渡り歩いてきた安東師匠がようやくスポットを浴びた事は、大変嬉しい一大事であると言える。これを大きな変革の前触れと見るか、内に閉ざされた一部の家の芸にあつて「焼け石に水」にすぎないと見るかは、それを支える聴衆の質次第だ。聴衆が何を古典伝統芸能に求めるのが、今後問われてゆく事になるう。

正直、私は狂言において、「家柄・由緒・血筋」に全く興味がわかない。某家の古格を遵守せんとする芸風には、演劇的な必然性が全く感じられないし、別の某家のようにかく笑わせればよいとする崩れた芸風には、嫌悪感すら抱く。しかし、本来狂言そのものには、西欧のオペラやオペレッタに拮抗する高い芸術性が内包されている。血縁関

係の系図ではなく、芸の質に即した師弟関係の系図を作ったら、また随分古典の世界も違った見え方がしてくるような気がしてならない。余談ながら、江戸時代末期から明治にかけて活躍した、敬愛する画家の河鍋曉齋は、三番叟を披いた程の相当な腕前の狂言師だったらしいが、狂言の歴史の表舞台にはほとんど登場しない。これまた私の大好きな、同じ時期に奈良の一刀彫で能楽を題材にした作品を数多く残している森川杜園も、狂言師として一流の腕前だったと云われているが、その部分の詳しい資料が全く残っていない（誰も調べていないだけなのだろうか？）。これも残念な事だ。

世阿弥の指摘した「幽玄の上階のおかし」を形にするべく、600年の月日の中で先人たちが培って来た狂言の舞台芸術としての智慧の結晶は、安東師匠の芸からは垣間見る事が出来るし、自分たちがそれに肉薄するべく汗を流すことには、意味がないとは言えまい。ようやく最近、世阿弥の能楽論を少しずつ読み進めているが、目からうろこが落ちるような事はかりだ。ここには洋の東西を超えて通用する、普遍的な舞台芸術論がちりばめられている。僕らも、ドツアワーやデューポールに負けない、素晴らしいエチュードを手に入れている。とりあえずそれをきちんと知ることから始めようと思つ。

二つの系図の、会ったこともない芸の祖先の皆さんに敬意を表して、献杯！（麦茶ですけど。）



井上放雲（いのうえ ほううん）

兵庫県生まれ。

相愛大学音楽学部卒業、ポーランド留学、国立ワルシャワ・シヨパン音楽院修了。チェリストでもある。日本の舞台芸術理論を学ぶべく、安東伸元に師事。バルト三国・イラン公演に参加。室内音楽グループ『アンサンブル「ベンジエ・ドブジエ」』の代表を務め、東西古典文化の間を日々驚嘆の喚声を発しながら往復している。相愛大学と大阪芸術大学で非常勤演奏委員を勤める。

物言うつからだ4

金久蒼汲

「身体表現」ということばについて、どのようなイメージを持っているでしょうか。一般的には、演劇やオペラといった意識的な表現行為を意味し、一般の人々の日常生活には関係がないように受け取られる傾向があります。実は私たちの何気ない無意識的な表現も「身体表現」であり、すべての人は、日常的に身体表現をしているのです。例えば、歩いているとき、食事をして

いるとき、人と待ち合わせをしているとき……。そのような歩き方や食べ方、待ち方もすべて身体表現の一部であり、そこにはそれぞれの人の感情や思考など、心の状態が反映されており、その歩き方や食べ方、待ち方を見た人は、逆にそこから「あの人は急いでいるのかな」「美味しい食事なのかな」「待ちぼうけをくっているのかな」というように、他人のからだに心の状態を読み取っているのです。また私たちは日常、言語によって自分の考えや感情を表現し、他人と交流していますが、それ以上に、その人の表情や姿勢や動作が、無言のうちにその人の本音を語っていると感ずることはないでしょうか。何か嬉しいことがあった時、それを満面の笑顔で、身振り手振りを交えて

話す人と、無表情で身動きもせず淡々と話す人とは、前者にその喜びの大きさを感ずるように、身振り手振りなどの身体動作は、人間の喜怒哀楽の感情を強化し、よりその場に応じたものとして伝える役割を果たしているのです。他人に敬語を使い、礼儀正しく話していても、その人がふんぞり返って腕組みをしていては、その人がどんなに丁寧な言葉で話したとしても、その人の真実は話される言葉にあるのではなく、その横柄な態度に象徴されてしまつたのです。話し手が自分の本心を悟られまいと、話し言葉を工夫しても、身振り手振りなどの身体動作は、自然に本心を語ってしまうのです。このように私たちが伝達手段として最もよく使う言語では、その言葉の持つ意味だけが、直接的に伝わるのではなく、その言葉を発する時の声量や声質、表情や姿勢、目線やしぐさなどが生み出す意味をも含めて伝わるのです。そして私たちは、言葉よりも身振りにその人の真実をみることで多いように思います。日常の何気ない無意識の動きに、その人らしさは出てしまつものなのです。

昨年十月からNHK大阪文化センターで開講されている「狂言エクササイズ」が、最終日の発表会を以って、今期ひとまず終了しようとしています。この講座は、私たち日本人に最も適した狂言の発声、所作を

訓練し日常に採り入れることで、精神的にも肉体的にも健康的なからだ作りを目指すという目的で開講されました。開講当初はあれもこれもと欲張りすぎて、うまく考えがまとまらず、受講生の方々を幾分困惑させてしまったかも知れませんが、また「エクササイズ」という言葉の解釈に窮し、何を以ってエクササイズとしたものか悩みは尽きませんでした。しかし、回を重ね、受講生の方々と話をするうちに、結局は今の自分の中にあるものしか出てこないという単純なことに気付きました。これまで私自身が舞台上に立ち、狂言で培ってきたものを、自分なりのやり方で、自分なりの言葉で受講生の方々と共有することにしたのです。もちろんエクササイズと名乗るだけあって、心とからだを意識したメニューを用意しますが、それだけに囚われず、その時々状況に応じた講座を心掛けました。またこの講座では「立つ」「歩く」「謡う」をキーワードに、内に秘めた自己表現力を探るとして、狂言小舞を稽古してきました。その主な目的は「日常を切り離す」「他人に見られる」「自己を表現する」の三点です。それだけなら狂言の稽古をすれば良いのかも知れませんが、この講座ではあえてそうしませんでした。なぜ狂言を稽古しなかったのかと言いますと、狂言の表現の主役はセリフであり、狂言の身体表現はあくまで

その主役を補佐する脇役にすぎず、第一義的な意味を持たないからです。一方狂言小舞はセリフに頼らず、身体表現を主役として、第一義的な意味を持つ活動なので、心とからだに主眼を置くエクササイズとして最適だったからです。はじめのうちは慣れない動きに困惑しますが、次第に慣れてからだが無意識に動くようになると、心に余裕が出来てきます。心に余裕が出来てくると、自然とそこに自己が投影されてくるのです。受講された方々の、日常の何気ない無意識の動きの中に活かされて、はじめてこの講座は意味を成すのです。狂言エクササイズを通して、受講生の方々や私自身の心とからだの変化を続けるように、また来期以降もこの講座が進化していけるよう、感覚を鋭敏にしたいと思います。



金久蒼汲（かねひさそうきゅう）
広島県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。演劇人としての肉體訓練の重要さを自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。自国の古典芸能を体得し、より人間らしく生きるための「古典演劇教育論」の確立を目指す。二〇〇三年イラン公演、二〇〇四年インドネシア公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室、NHK大阪文化センター講師。

「だって日本語だもん」

原 斗轟

2007年6月の大和座通信で、「興味」が持てない現代人について書きました。今回はその問題を解決するキツカケになるのではないかと思う出来事があったのでご報告致します。

私には去年の春に専門学校を出て就職し、今年の4月で社会人2年目になる21歳の友人がいます。そんな友人を一度京都の観世会館へ連れて行って能を観劇させたことがあります。「能なんて見たことがない」と渋っていました。半ば強引につれていきました。教育テレビか何かで見たことがあったのか、彼は始まる前に「寝るかも知れないが、がんばっておきている」と言いましたが、案の定彼は約3時間の上演を寝ていました。終演後私は彼に「どうだった？」とおおよそ答えは決まっているだろうと思われる質問をしてみました。しかし彼の口から出た感想は僕の予想とは違っていました。彼は申し訳なさそうに、途中寝てしまった事を詫びたあと、「でも面白かった」と答えたのです。何が面白かったのかと尋ねると、「太鼓の（恐らくお囃子の）ことでしょう（？）リズムが面白かった。叩く姿も目が離せなかった」と素直に印象を語りました。

初めて出会う音楽だとも言いました。その後も彼には私の狂言の演目の話や台詞などを機会があれば話していきましました。そしてある日のこと、狂言「柿山伏」の台詞を彼に聞かせていたときのことです。全部言い切った後に彼に内容は理解できたかと聞きましました。すると彼は「解かったよ。面白かった。」と答えたのです。細かな言葉の意味までは解からなかったようですが、見事に狂言の台詞を理解していたようです。私は驚いてしまつて彼に「言葉わかる？」と聞くと、「なんとなく解かった。だって日本語だもん」と答えたのです。私はこの言葉を聞いて嬉しくなつてしまいました。これまでに狂言の台詞を聞かせると「呪文のようだ」「他の国の言葉みたい」という答えしか返つてこなかったのに僕にとっては初めてのまともな反応だったからである。

彼は決して大阪芸術大学で私が狂言を学んだような授業を受けてきた訳ではありません。むしろ「中学高校は勉強が嫌いだつた」と答えるたように、自らが学ぶよりもテレビやインターネットなどのようにメデイアを使って楽しませるシステムの中で育ちました。いろいろな経験をすることなく疑似体験を繰り返すうちに、感じることも興味を持つことが欠落していった世代なのです。そんな彼が放つた「だって日本語だもん」の一言は、ほんとに何気ない一言で彼

は何かを意識して言つたわけではないと思ひます。古典に触れそれなりの知識を身につけても、古典が「日本語」であると気づける人はあまりいないのではないのでしょうか。彼の中に特別古典に興味を湧いた訳でも、大きく人格が変化した訳でもないかも知れませんが、彼のこの一件は、私の考えを改めさせました。彼や学生達は日本語に対する素養が無いのではなく、それに気づけるキツカケがないだけではないのでしょうか。彼の場合は古典に触れることでその素養が芽吹いたのだと思います。



原 斗轟（はら とこう）
福岡県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義において安東伸元の薫陶を受け、卒業後安東伸元に師事。古典の力を体内に埋め込み、現代演劇の様々な分野で生かすべく自身を鍛えている。二〇〇七年八月『兵士の物語』に於いて兵士役を勤める。

女は女である

久保朋子

謡の稽古をするとき、高い声で唄い始めると、途中の高い音程のところでは声が裏返り、他の謡の声の中で浮いてしまいます。また、1オクターブ下げて、低い声で唄い出すと、その音よりも低くなったときに声が出なくなり、どっしりした謡の舟にうまく乗るのは難しく感じます。やっぱり狂言の謡は、テノールやバスといった男声であって、アルトやソプラノの女声ではないのかな、と考えます。それでも声を出すことが稽古ですから、構わず大きな声で唄います。しかし、地謡の中で声を出すとき、ふと自分の素っ頓狂な声がせつかくの謡を邪魔しているかもしれない、とついつい声を小さくしてしまふときがあります。

最近、小舞を観察していると、とても直線的であることに気づきました。立ち姿勢の上半身を真横から見ますと、腰から背骨、首筋から頭のとっぺんまで一直線で、そのまま前傾しています。腕も同様です。私には手に力が入ってしまい、手首が内側に曲がる癖があります。力が入るのは小指と薬指だけで、右手ならば肘から扇子の先ま

でが一直線になるように。」と先輩に教わりました。舞の運びは、ふわりと舞うのではなく、ぴりっと呼吸が止まるように決める。まるで一本の糸をぴんと張っているような緊張感は、とても直線的に見えます。直線的な小舞、ということを見出し、私は先輩の後ろで稽古をしていますと、何か決定的な違いを感じます。どうも先生や先輩の描く舞の線のように描けない、何が違うのだろうと考えていましたら、自分の身体の輪郭が直線ではなく曲線であることに気づきました。先輩の描く舞の線を辿ろうとすればする程、自分とはかけ離れたものを感じ、失望します。曲線は出したいくない！お手下通りに描こうとした私の小舞は、おずおずとすつきりしない、くすんだ小舞になってしまいます。

狂言を演じている演者の横顔を、舞台袖から見るのがとても好きです。はつらつとした表情で幕に入ってくる役者は、戦から戻ってくる兵士のようなものです。自分が舞台上立つよりも、客席からは見えない舞台袖でずっと見ていたくなります。能舞台上立つと、丸裸にされた自身の姿をまざまざと感じます。自分の不恰好さ、出来損ない加減、浅はかな考え、むしろ自身のあらばかりが浮き彫りにされ、愕然とします。それに、全ての装飾を拒否した空間に、色も香りも必要ありません。私は自分が舞台上立つと

き、無意識に何かを漂わせていることに気づきます。まるで能舞台は私を拒否し、嘲り笑っているようです。女という匂いを隠そうとして不恰好に舞うのをやめ、家でご飯の支度をして戦地から帰ってくる男を待っていないさい、という声が聞こえます。

謡や小舞、能舞台によって、自分が女であることをたたきつけられます。またそれらは全て、私を拒否しているように思えます。私は大きな矛盾を抱えています。美しく立つ女になるために舞いたい。けれども私が立つのは舞台ではなく台所かもしれない。自分が向かっているところにはたどり着くために、今していることは何だろうか。本当にそこにつながっているのだろうか。久保君、気づくということ、不幸なことかもしれないねえ。」と安東先生が仰いました。稽古を重ねることは、より多くのことに気づいていくことです。気づくことは、恐怖を伴います。ちょうど舞台上立ち、一足前へ出るものがとてつもなく恐ろしくて身体がゆらゆらしてしまうように。そのとき、やるかやらないか、舞うか舞わないのか、と選択を迫られます。もう一足前へ出れば、もっと多くのことに気づき、先へ進む恐怖感が増します。もうやめてしまえば幸せなのに、という声がこだまします。それでもまだ続けるのか……。私は、あらゆることの中から選択をして、

ここに立っています。幕はすでに上がっています。もう先に進むしかないようです。自分は女であり、不完全であるということを感じながら舞台上に立つしかありません。己を隠せば隠すほど、何か奇妙で不自然な形を描くことになる。私は男ではありません。女は女である、仕方ありません。素っ頓狂な謡も、おずおずとした不恰好な小舞も、ふてぶてしく披露するしかありません。



久保朋子(くぼ ともこ)
兵庫県生まれ。

大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。モダンバレエ・ダンスを勉強中。身体的な観点より、小舞に興味を持つ。去年より安東伸元のもと、日本の古典・人間の本质を学ぶ。

将惶の新局面

「演劇から言葉の伝え方を学ぶ」

言葉を使わずに何かを表現する芸術分野は音楽家や画家や舞踊家(ダンサー)等、たくさんありますが、言葉を主に使って表現する役者等には言葉を扱う事はとても重要な事です。

台本に書かれている文章からメッセージを読み取り、役者の口から言葉を使ってお客さんへメッセージを伝えます。この時、言葉の強さ・速さ・間の取り方でメッセージの伝わり方は大きく変わります。

狂言の場合は独特の言葉遣いやリズム等も加わってくるので、言葉一つとっても様々な要素が絡んでくる事になります。メッセージを伝える方法は言葉だけではありませんが、役者としてメッセージを読み取る力と言葉を伝える方法をしっかりと身に付けていきたいと思えます。

少し観点を变えますと、メッセージを読み取る力と言葉を伝える方法は、人の気持ちを考える力と自分の気持ちを伝える方法に置き換えられる様な気がします。そう考えますと、狂言を含む演劇は、現代社会で希薄になってきている人と人とのコミュニケーションを学ぶ一つの方法として、芸術の分野だけではなく教育の分野へも応用出来るものだと言えます。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

五月

一日(木) 『蝶六の会』落語、そして狂言』

開場：午後六時・開演：午後六時四十分

場所：天満天神繁昌亭〇六・六三二・四八七四

入場未就学児入場不可

前売り 二〇 円

当 日 二五 円

小・中学生 一五 円

身障者・高校生・大学生 一八 円

演目：落語「佐々木裁き」桂蝶六

ゲスト 林家花丸・笑福亭喬介

・狂言「伊呂波」「水掛婿」

安東伸元

金久倉汲

原斗轟

寺西将星

森五六丸

前売りチケットぴあ・ファミリマート・

サークルK・サンクス・賑わいや・

天満・天神繁昌亭

お問い合わせ：賑わいや

〇六・六一六七・二五二五

十日【土】『大西松風社定期能』 上期第三回

開演：午後一

場所：大阪能楽会館〇六・六三七三・一七二六

入場：当日：五五 円・学生：二〇 円

能：「俊寛」小西弘通・永留浩史・茂山良暢 他

狂言：「口真似」茂山忠三郎・安東伸元・茂山良暢

仕舞：「鐘之段」「網之段」「鵜之段」

能：「誓願寺」大西智久・江崎金治郎 他

十二日【月】『興福寺新御能』 南大門の儀

開演：午後五時三〇分

能：「東北」（宝生流）辰巳満次郎・福王知登 他

狂言：「太刀奪」茂山忠三郎・安東伸元・山口耕道

能：「鉄輪」（観世流）観世喜之・福王和幸 他

お問い合わせ：

〇七四二・二二・七九二九（金春欣三）

六月

四日【水】午後一時開演 堺能楽会館

『大浜中学校 狂言鑑賞会』非公開

九日【月】午後一時開演 大槻能楽堂

『市岡高等学校 能楽鑑賞会』非公開

十三日【金】午前十時開演 大槻能楽堂

『関西大学第一高等学校 狂言鑑賞会』非公開

六月二十五日【水】

A&Hホールシリーズ公演 VOL

「古典伝統芸能と出会うひととき」その五十二

《笑劇の古典力》・言葉の遊び

歌唱演習「心を鎮める謡」 指導：安東伸元

狂言「呂連」 旅の僧：原 斗轟

妻 寺西将星

宿の亭主：井上放雲

狂言「宗論」

浄土僧：安東伸元

法華僧：金久蒼汲

宿の亭主：寺西将星

入場料 会員 一五 円

一般 二〇 円

学生 一五 円

小学生以下無料

お問い合わせ A & Hホール

〇六・六八七三・二二六 七

本の紹介

神戸大学名誉教授 山崎 馨 著

『日本語の泉』

歴史的かなづかひの本

目次はお出かけの姿、内容はふだん着のまま、読者の皆さんに語りかけます。

読みやすく分かりやすい文章によつて、皆さんの日本語が一段と美しくなるためのお手伝ひをします。

精妙整然とした日本語の姿を

歴史的仮名遣ひで綴る随想風日本語論

国語学国文学の専門家を除いて、ひろく老若男女に贈るべき随想風日本語論。日本語についていろいろと知っていただき、読者各位の日本語が一段と美しくなるために、少しでもお役に立ちたいものです。そこに日本語の精妙整然とした姿も、ほの見えてくるはず。貴重な絶滅危惧種(歴史的かなづかひ)にも光をあてました。

本書の主な項目としては、音と訓、片仮名と平仮名、五十音図、いろは歌、あめつちの詞、ふねとぶな、てにをは、君が代の歌、万葉仮名の話、上代特殊仮名遣の話、推古期遣文の話、五世紀の金石文の話、母音法則の話、情意性の形容詞などがあります。表紙、カバーでは、會津八一の墨蹟(集字)に著者自刻の木版画、花昨鳥文様を添へました。わかりやすく親しみ深い表現の花を、この鳥が皆さんのもとに届けます。

発行所：和泉書院

定 価：一五〇〇円

和泉書院 HP: <http://www.izumi.jp.co.jp>

TEL: 06-6771-1467 FAX: 06-6771-1508

編集後記

今年大学を出た若者を「カーリング世代」と呼ぶそうです。ブラシで氷上を磨いて、石を滑らすカーリング競技のように、周りがお膳立てをしてあげないと自らは動けないという意味だそうです。ニュースによると今年は就職にも大変恵まれていたそうで、マイクを向けられた若者は「良い時代に生まれた」と言う者やカーリング世代と呼ばれる事に対して頑張つて汚名返上すると語っている若者もいてなかなか面白く感じました。確かに年々若者に対する頼りないイメージが増長しているように感じます。

でもちよつと考えなければならぬのは、「頼りない若者」が産出される原因が、果たしてその若者達だけの責任かという事です。それを後押ししている社会の流れや大人たちの存在も忘れてはいけない気がします。

それと同時に、今回原斗轟の文にあった狂言の台詞を聞かされて「呪文のようだ」「他の国の言葉みたい」と答えた子たちと「だって日本語だもん」と答えた子との違いは何なのかと考えたとき、それは、狂言の台詞を「日本語」として認識する機会に出会えたか、出会えなかったかだけのよう

な気がします。そんな機会など、与えられるのではなく、自ら「む」ものだと言つてしまえばそれまでですが、すでに社会全体が自国の文化や言葉に目を向けなくなつてしまっている現状があるわけで、その現状を作り出している社会の流れを無視して、すべての責任を若者に科すのは、少し酷な感じが致します。自国の文化や言葉に目を向ける、すなわちこれが国が提案した「美しい国作り」であつたはず。そもそも国が自ら提案した事に対して責任を取らない、「頼り無さ」を剥き出しにしている事を忘れてはいけません。

4月になり2008年度が始まりました。大和座はこれからも「日本語」を大事にし、「日本語」の美しさを伝えていきたいと思ひます。

小田兆紀は故障した膝を治すため、しばらく舞台活動を休ませていただきます。完治し、再び舞台でお目にかかりたいと存じます。

これからどうぞよろしくお願い致します。

秀

発行日二〇〇八年四月 十日

編者 許 秀美

発行者 安東伸元

大和座狂言事務所

代表 安東伸元

〒五六五-〇八四二

吹田市千里山東二丁目三之三

TEL 06(63384)5016

FAX 06(63384)0870